気がつけばイエスはここに　　**ルカ 24:13～35**

礼拝とはイエス・キリストにお会いする時ですし、主の備えてくださった十字架による罪の赦しと復活のいのちに活かされて新しい週を始める時です。主イエスは言われました。「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」マタイ 11:28 たとえ、どんな重荷をかかえていても、礼拝に来るとき、わたしたちは、復活されたお方、いのちの主に出会い、疲れたからだと傷んだ心をいやしていただき、このお方のもとに重荷をおろすことができるのです。イエスはご自分の約束に真実なお方であり、信仰をもってイエスに近づくとき、イエスはかならずそこにいてくださいます。ただどんなにイエスがわたしたちに近づいてくださっていても、すぐそばにいて下さっても、わたしたちの側に信仰がなければ、イエスに出会い、イエスを知ることはできません。

きょうの箇所の、エマオの村出身のふたりの弟子がそうでした。復活されたイエスがふたりと一緒に歩き、語りかけておられるのに、このふたりは、それがイエスだと分からなかったのです。しかし、彼らはイエス様の取り扱いを受け、最初から共にいて下さったのはイエス様であることが分かり、「道々お話しくださる間、私たちに聖書を説き明かしてくださる間、私たちの心は内で燃えていたではないか。」ルカ 24:32 と語るまでになったのです。イザヤ 9：6 に救い主が誕生し、その名は「不思議な助言者、力ある神」と呼ばれるとあります。不思議な助言者は英語ではワンダフルカウンセラーと訳されています。カウンセリングとはカウンセラーが相談者との関係によって相手の行動や思いが変化してゆくことと定義づけられています。イエス様は素晴らしいカウンセラーとして、落ち込んでいた二人の弟子たちとどのように関わり、また変えられていったかそのプロセス見てゆきたいと思います。そしてイエスは私たちに対しても同じように関わって下さろうとしていることを信仰によって受け止めてゆきたいと思います。

先ず時は彼らが出身の村エマオに行く途中のことでした。行くというよりも帰る途中でした。というのもエルサレムであったイエス・キリストの十字架からくる失意と落胆の中に彼らはいたのです。出来事すべてについて話し合ったり、論じ合ったりしていたと書かれていますからずいぶん語り合ったことでしょう。こういう時の議論は否定的な方に流れ、先鋭化し、悲観的な結末を想定しやすいものです。心は絶望的な状況でしたのでイエスがそばを一緒に歩かれても彼らは気がつきませんでした。そしてイエスが「歩きながら語り合っているその話は何のことですか。」ルカ 24:17 と聞かれると「二人は暗い顔をして立ち止まった」とあります。これはとても印象的な場面です。人が癒されてゆくためにはまず辛い現実ともう一度向き合わなければならないのです。さらにクレオパという人は「エルサレムに滞在していながら、近ごろそこで起こったことを、あなただけがご存じないのですか。」と言いました。この言葉の中には悲しみと共に強い怒りの感情が入っているように思われます。自分たちは人生の危機的な状況の中で悩み苦しんでいるのに、そんな悠長な質問をしてくる人の気が知れないとでも言いたげな様子です。

さらにイエスは「どんなことですか」と聞かれ、二人のことばに耳を傾けられたのです。主イエスはいきなり「私だよ。私はここにいるではないか」と言って彼らを驚かせたり、叱りつけたりはされなかったのです。というより彼らの失望と落胆の思いが強すぎて、何も頭や心に入ってこないぐらい否定的な感情に心がとらわれていたのです。彼らだけが特別なわけではありません。私たちも時に極端に否定的な思いや病的な思いを持つことがあります。「私は世の中で一番不幸な人間です。」「世の中の人すべてが私のことをバカにしている」など強い否定的な感情を持つとそれは強い確信や信念、時には病的に思えるぐらいの考えを持つことがあります。それからこのふたりは、心の丈をイエスに打ち明けます。その話の内容とはイエスは「力のある預言者」であり、また「イスラエルを解放してくれる人、すなわち救い主」(19-21 節）と人々から呼ばれ、自分たちは望みをかけていたけれども、結局死刑となり十字架につけられたということでした。それ以外にも、墓に行った仲間の女たちがみ使いから「イエス様は生きておられる」と告げられたいう話も聞いていました。さらに、墓を確かめに行った仲間の弟子たちから、墓が空でイエスの遺体がなかったことも聞いていたのです。そういった話をいろいろと二人で話をしたり、議論をしていた

のですが結局、彼らの心を占めていたのはイエスの十字架は敗北のしるしであり、この先自分たちの将来には何の望みも生きがいもなくなってしまったということだったのです。つまり、復活の主イエスがすぐそばにおられるにも拘わらず彼らの心は十字架、それも敗北の十字架を背負ったままであったのです。

そんなふたりにイエスは「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。」ルカ 24:25 と言われました。「愚かな者たち。」とはかなりきつい言葉です。このことばをイエスもここでしか使っておられません。それは、このふたりを叱るためでも、まして馬鹿にするためではありません。ここが彼らが生きるか死ぬかの分岐点となるからです。復活の信仰を持たないまま失意のまま自分たちの村に帰っていこうとするこのふたりを真理に導き、その心に光を与え、信仰に導いて、エルサレムの仲間の弟子たちのもとへと連れかえすために、イエス様は彼らにそう語られたのです。主イエスは続けて「キリストの十字架の苦しみは栄光を受けるためにどうしても通らなければならない」ことを語られました。さらに主イエスについて聖書全体が語っていることが説き明かされました。もちろん、この聖書全体とは旧約聖書のことを意味しますし、ご自分についてとは救い主についての預言の箇所であったということです。イエスが語られたことの多くはすでに彼らが主イエスから教えてもらったこと、聞いたことでした。しかし、改めて彼らは教えられたのです。これは大切なポイントです。ここでイエスがどんなに大声で、馬鹿者！目を覚ませ！しっかりしろ！と言われても彼らは戸惑うか、もしくは「なぜそんなことを言われなくてはならないのか」と反発したことと思います。彼らは聖書については初めて聞いたことではなく、すでに聞いたことがあるけれどもキリストの復活のことまで思いが至らなかったのです。もう少し、客観的に言うならば、キリストの復活という事実がありながら、彼らの心はキリストの受難の思いで一杯の中を生きていたのです。今もそういう人がいるかもしれません。イースターが終わって日が経つのに、心は受難週！という人が。ただ後で振り返った時に、聖書を教えてもらいながら心は燃えていたと言われているようにこの弟子達はみことばをしっかりと聞き、信仰があればこそ感動したのです。聖書のことばによる福音の真理はいつの時代、どの状況いかんに限らず不変です。

自分たちの村に着いたふたりは、今まで一緒に歩いてきた旅人に、それがイエスだとは気付かずに「一緒にお泊まりください。」ルカ 24:29 と願いました。この「泊まる」という言葉は聖書では特別な意味を持っています。これは単に、旅行者が、誰かの家に泊まるという、物理的なことだけを言っているのではなく、霊的、信仰的に、イエス・キリストが信じる者と共にいてくださり、信じる者がキリストと共にあること、キリストとつながっていることを表わしています。この言葉がそのような意味で使われている箇所で、いちばん重要な箇所は、ヨハネ 15 章でしょう。その 4 節でイエスは弟子たちに「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」と言われました。この「とどまる」は、「泊まる」と同じ言葉です。わたしたちがキリストと共にいること、キリストがわたしたちと共にいるというのは、キリストとの物理的な距離の近さのことではありません。また時間の長さでもありません。わたしたちがキリストにとどまり、キリストがわたしたちと共にいてくださるというのは言わば有機的な関係です。有機的とは互いに作用し合っているということです。キリストと信仰者の関係は、ぶどうの幹と枝と同じ関係です。枝が幹から養分を得て育ち、実を結ぶように、信仰者は、みことばによってキリストからいのちを受けて、成長するのです。それはキリストがわたしたちを生かしてくださり、わたしたちがキリストによって生きるという、いのちの関係でもあるということです。

主イエスは「わたしたちと一緒にお泊りください」との言葉に答え、ふたりの家に入りました。強く勧めたとありますので彼らはもっとイエスから話を聞かせて欲しかったのでしょう。それから、食卓に着いて、パンを祝福されました。そのときの様子を、聖書はこう書いています。30,31 節「彼らと食卓に着かれると、イエスはパンを取って神をほめたたえ(祝福する)、裂いて彼らに渡された。すると、彼らの目が

開かれ、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった」これは、主の晩餐のときの言葉そのものです。

ただ最後の晩餐には十二弟子しかいなかったので、このふたりが、パンを祝福して渡す姿を見て、それがイエスだとわかったというのは、イエスが五千人の群衆にパンを分け与えられたときのことを思い起こしてのことだろうと思います。そして彼らの目が開かれた時にイエスが見えなくなったとは不思議な表現ですが一体どこにイエスは行かれたのでしょうか？　主イエスは彼らの内側におられます。イエスが見えなくなったので不安になったのではなく、この人はイエスに違いないと確信した時に見えなくなったのです。ちょうど赤ちゃんや幼い時は親が見えなくなると不安と恐れがやってきます。しかし、成長すると親が見えなくなっても不安はありません。いるかいないか確かめる必要ないのと同じです。

それから、ふたりは、今まで一緒にいてくださったお方がイエスだったと分かったとき、すぐさまエルサレムに引き返しました。イエスには「そろそろ夕刻になりますし、日もすでに傾いています」ルカ 24:29 と言って引き止めたのに、自分たちは夕暮れの道を駆けて、エルサレムにいる他の弟子たちのところに向かって行ったのです。どうして引き返したのでしょうか？　それはイエスに出会ったとき、自分たちの帰るべきところがエマオではなく、エルサレムであることが分かったからです。彼らはそれまで様々なことを聞いて来ました。イエスが教えてくださったこと。教えと共にイエスがなさった奇跡や癒し。しかし、十字架で凄惨な死を遂げられたこと。そして主イエスは復活され、もう墓は空っぽであること。それらは復活の主イエスに会うことによって新たないのちを得て、働き出したのです。

わたしたちも、このふたりのような体験をしたいと思います。たとえ、その心が、生活が、一時的に神から離れたものになっていたとしても、主は、わたしたちをお見捨てにはなりません。わたしたちに御言葉をもって語り続け、ご自分のもとへと呼び戻してくださるのです。その語りかけに耳を傾けましょう。ヨハネ 14:26 に次のようなみことばがあります。「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」私たちはみことばを読む時に心燃やされたという体験があるでしょうか。これは何も叫び出すとか踊り出すということではありません。みことばの真理に導かれて、暗く汚れた心の雲が取り除けられ、心が喜びに満ち、強くされるということです。他人の証しに励まされることはありますがそれよりも自分の内側でみことばの真理に触れ、活かされることが一番です。もしそれを求めようという気もないとしたら、パウロのことばによれば「私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です」コリント第一 15:19 ということになります。

主イエスは私たちと共にいてくださいます。どんなに失意と落ち込みの中にあっても私たちをそのまま放っておかれるようなことはありません。気づけば主イエスはそこにおられるのです。ある時は人を通して、ある時は心の中に。願わくは主イエスのご臨在に少しでも触れさせていただけるようなこの週を過ごしたいと願わされます。祈ります。